

## 紙

— 料紙装飾の世界 —

2021年4月6日(火)~6月6日(日)  
公益財団法人大倉文化財団 大倉集古館

※文中の❖01などの数字は作品リスト番号です。

料紙とは一般に書に用いる紙をいいます。本展では文字や絵をより美しくみせるために料紙を加工した「彩られた紙」を取り上げます。湿らせ丹念に叩いて滑らかにする「打紙」、文字に変化を与えるため凹凸に加工した紙、色紙に金銀を蒔くなど華やかに装飾された紙などがあります。

展示では「奈良時代 写経の荘厳」「平安時代 王朝の栄華」「平家納経 善美を極めるI・II」「料紙に求めるもの」「さまざまな時代の料紙」「田中親美の世界」「江戸時代 美の継承」「大津絵をたのしむ」の章ごとに、料紙をマイクロスコープの拡大画像とともにご紹介いたします。人々の願いや美意識が反映された各時代の料紙装飾に光をあて、そこに託された祈りや夢、そして美の移り変わりを探ります。

## 〔奈良時代 写経の荘厳〕

❖01「賢愚経」は賢者・愚者に関する寓話を集めた經典。聖武天皇が建立した奈良・東大寺に伝来し、その雄渾な筆跡から、「大聖武」の名があります。ニシキギ科のマユミの繊維を原料とし、白くするために混入した胡粉と凝固した樹脂の粒が入っており、茶毘紙とよばれます。正倉院文書の分析から、天平時代の9年間だけに使用されたと考えられている特別な装飾料紙です。



賢愚経断簡(部分)



繊維に覆い被さる白っぽいものが胡粉  
樹脂の粒の左手前に金箔が付着(811倍)

## ❖03「隋経切」(「古経貼交屏風」のうち)

中国・隋時代の写経料紙は、繊維の隙間を埋めるため石膏などの鉱物性の白色粉末や、墨の滲みを防ぐ目的で澱粉などが混入されています。麻の繊維はよく叩かれて枝分かれています。



(750倍)

## 〔平安時代 王朝の栄華〕

## ❖04「訶利帝母真言经(神護寺经)」

鳥羽院が発願して制作し、神護寺に施された紺紙金字一切経の一卷。この經典は鬼子母神について詳しく説明したものです。

見返しは、金銀泥で描いた釈迦說法図です。經典用の料紙を、仏教で七宝の1つとして重んじた「瑠璃」の色に染めるため、藍甕に何回も浸して染め重ねをします。金泥書きの経文には光り輝くように硬いもので磨かれた痕跡があります。



(透過光画像)

❖05「貫之集下(石山切)」 「本願寺本三十六人家集」より分割された「貫之集下」の冊子本の断簡。楮紙に藍と黄蘗を染め重ねた右側の緑色の料紙中にあるほぼ1mmの異物を拡大すると、植物の断片のようです。こうした植物などのDNAを

解析すると、料紙の制作過程や産地を知る手がかりが得られます。また左側は中国の唐紙を模倣した和製唐紙です。上質な雁皮紙に具引き(胡粉を塗る)し、雲母摺りなどを施しています。もとは両面書きの冊子本に仕立てられていました。



混入した植物の断片(216倍)



剥落した胡粉の間にみえる雁皮繊維(700倍)

# 〔平安時代 王朝の栄華〕

## ❖06 国宝「古今和歌集序」の料紙の秘密

「古今和歌集序」の料紙は、中国・北宋時代に作られた装飾料紙の唐紙を用いています。保存状態が良く、ほぼ裏打ちがされていないため、美しく装飾された料紙の表と裏を観察できます。竹を原料とする竹紙の表裏に、さまざまな色の具引きをした上に、版木を使い雲母摺りと空摺りの2種類の技法によって、伝統的な吉祥文様などを摺り出したものです。

この唐紙の雲母摺りで、金色にみえる黄雲母摺りは砒素を混ぜているとみられます。空摺りは具引きした紙の下に型文様の版木を置いて上から硬いもので文様を摺り出します。日本の空摺りとは異なり、胡粉の色に深みと艶が出て、蠟を引いたようにみえることから、中国では「研花紙」、日本では「蠟牋」とよばれる中国独自の技法です。その珍しい文様などが平安時代の貴族に好まれましたが、鎌倉時代には、入宋僧の道元筆の国宝「普勸坐禅儀」をはじめ、禅僧の墨蹟などに多くみられます。



合生唐草文様黄雲母摺り



孔雀唐草文様の胡粉地の下に布目



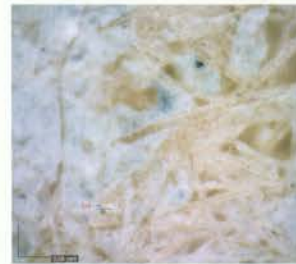
孔雀唐草文様を摺り出した跡



裏側に胡粉地と版木跡がある

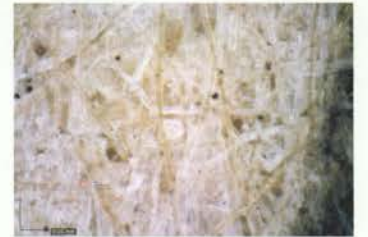


孔雀の蠟牋の拡大(700倍)



孔雀の胡粉剥落部の竹繊維(707倍)

❖07 「大唐三蔵取経詩話」「西遊記」のもととなった唐僧玄奘(602~664)が経典を求めてインドへ旅した見聞録で、南宋時代に出版されました。当時の主な書物の料紙は竹紙が中心で、通俗小説の料紙にも竹紙が使われていたことがわかります。



竹の繊維は太さは約0.01mmほどで先端は針のように尖っています(707倍)

# 〔平家納経 善美を極める I・II〕



法華經法師功德品第十九



法華經提婆達多品第十二



法華經安樂行品第十四



国宝 普賢菩薩騎象像

## 驚異の再現 田中親美が制作した『平家納経』模本

大正9年(1920)正月、厳島神社の依頼を受けて、田中親美(1875~1975)による「平家納経」模本の制作がはじまりました。原本に忠実で精巧な現状模本が5年をかけて完成し、厳島神社に全33巻が納められると、さらに原本の当初の姿を想定した数組の復元模本が制作され、そのうちの1組が大倉集古館の所蔵となりました。

平家一門がその繁栄を願った『平家納経』の特徴は、大量の金銀を使って豪華さを極めている点にあります。

❖10 「法華經法師功德品第十九」の見返し絵は、金銀地に白線で肉身を描き、表情をうつつらと彩られた普賢菩薩が合掌し、白象に乗って、岩窟で机に経を広げる僧の前に来迎するという、きわめて幻想的な表現です。

併せて、❖09 国宝「普賢菩薩騎象像」も特別公開します。

料紙に関して、平家は他の貴族などが好んだ輸入品の蠟牋は使用しませんでした。金銀装飾に適した国産の紙に銀砂子を撒き、空摺りで天女や孔雀の文様などを磨き出し、上から金砂子を雲形に撒くという他にはみられない技法を用いています。

❖30 「法華經提婆達多品第十二」では、銀地の全体に唐草文を、❖31 「法華經安樂行品第十四」は上欄に天女と瑞雲、下欄に孔雀・草花などを空摺りで磨き出し、さらに上から金砂子を雲形に撒いています。

平家にとって、金銀地に空摺りで文様を磨き出す美しい技法は、厳島神社に対する特別な信仰のあらわれであったと思われます。

## 〔平家納経 善美を極めるⅡ〕

### ❖ 29 「法華経分 別功德品第十七」



### ❖ 32 「法華経動 持品第十三」



『平家納経』の表紙、見返しには大倉集古館の建築装飾と関連する意匠もあります。



提婆蓮多品の怪魚と、柱の吻



安楽行品の獅子と、階段の獅子

## 〔江戸時代 美の継承〕

### ❖ 38 「白地窠紋 散模様 袷狩衣」

狩衣は能楽における男役の装束。この装束には金箔で表現された木目紋とも呼ばれる大きな「窠」の文様が縫い付けています。この金箔を押す紙は雁皮を原料とする粘土入りの似合紙で、下張りに使うことで、金箔のしわが寄らず、その色が冴えるといいます。



※作品の保護のため畳んだ状態で展示します。



縫い付けた文様の一部



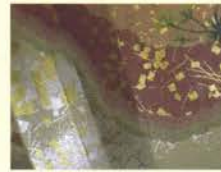
金箔の隙間にみえる繊維

❖ 39 「思羽」(松竹梅文蒔絵十種香箱のうち) 香道具の一つとして、組香の香包や香銘の短冊を入れる包みの一種。鶯鶯の思羽に似ることから名がつけられました。金布目地に草花などを描き、裏は金地に亀甲文を空摺します。伝統的な「折形」の礼法を受け継いでいますが、重ねた紙を等間隔にずらして用いるところは、「本願寺本三十六人家集」の重継ぎを連想させます。



## 〔田中親美の世界〕

❖ 33 「料紙装飾扇」 田中親美(1875~1975)は、明治8年大和絵師田中有美の子として京都に生まれ、同20年多田親愛に入門して書を学び、古筆の模写に精進しました。この扇には「本願寺本三十六人家集」、「平家納経」における模写技術が反映されています。



重継ぎ



金磨き出し



銀磨き出し

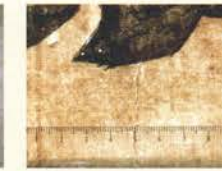
## 〔大津絵をたのしむ〕

❖ 41 「鬼の念仏」 大津絵のシンボリックな画題。恐ろしい鬼が、厳寒の師走に念仏を唱え、布施を乞うて歩く。実は僧のフリをした偽善者で、形だけの善行の例えとし、偽善をする人を風刺します。

楮紙に描いた絵を切り取って雁皮紙に貼りつけているのは、傷んだ料紙を綺麗にみせるための修理とされます。田河水泡氏旧蔵。



本紙の楮紙(706倍)



雁皮紙に貼りつけ

❖ 40 「香包」 組香で使用される小片の香木を包むものです。本香包は鳥の子紙などを使用します。本香の前に、客がその日の主題に合わせた香の香りを確かめる試香包には、趣向を凝らした色紙などが使われました。平安時代に流行した唐紙の文様である花襷、菱唐草、亀甲など、さらに藍や紫の繊維を雁皮紙に漉きかけた打曇もみられます。



菱唐草



亀甲



水玉



花襷



打曇

## 〔料紙に求めるもの〕

❖16「**尼序妙讃状**」(「**東大寺文書屏風**」のうち)康和4年(1102)6月、尼の序妙が裁判で取り戻した所領を、世話になった人物の妻に譲るとき、その内容を保証するため文面に手印を捺しています。料紙は乾燥時の板目や塵など荒々しい印象がありますが、これまで貴族や僧侶に限られていた紙の利用者層の広がりがうかがえます。



手印(部分)と板目がみえる

❖17「**関羽図**」は、中国・後漢時代の武将である関羽を描いた作品で、高さ約3mの巨大な幟(のぼり)に用いたと伝わっています。楮繊維のよく絡んだ丈夫で破れにくい紙を使用しており、表面の皺の様子から、楮紙の性質に似た紙と思われます。



料紙の表面



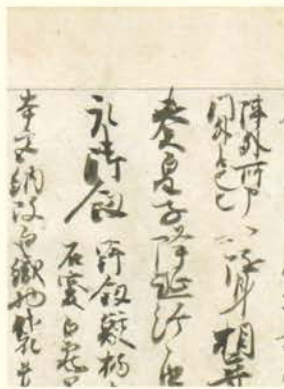
楮の繊維がよく絡んでいる(700倍)



関羽図

## 〔さまざまな時代の料紙〕

❖23「**山槐記**」平氏全盛期に建礼門院に仕えた内大臣中山忠親の日記です。料紙は、楮の繊維がよく絡み合った楮紙を使用しています。日記は職務の内容を後世に伝える役割があり、保存に適した紙が選ばれたのでしょう。この楮紙は、清少納言が『枕草子』のなかで、「何か腹立たしいことがあって、どこへでも行ってしまいたいと思うときに、ただの白い紙、高級な筆と、みちのく紙が手に入れば、それだけでもう気持ちを切り替えることができる」と記した「みちのく紙(陸奥紙)」で、のちに楮紙とよばれました。蚕の繭の表面のようなふっくらした感じの紙です。



山槐記(部分)



蚕の繭(参考)

❖28「**詩書卷**」本阿弥光悦(1558~1637)筆 木蓮の花のさまざまな姿を描いた下絵のある絹本に、光悦が漢詩を揮毫したもの。絹織物に書かれた文字は滲んで見えても、繊維の縦糸、緯糸に沿って墨が入って立体感があるのに対し、紙は繊維が絡み肌が細かで、墨線が自在に表現されています。



詩書卷の文字の部分(200倍)



23「山槐記」の文字の部分(200倍)



打紙で繊維の重なりが平滑になる(778倍)

❖24「**大般若経卷第五百五十五(足利尊氏願経)**」足利尊氏(1305~64)が、戦乱で亡くなった人々の慰霊と、天下太平などを祈って発願書写させた一切経。本紙、願文ともに楮紙を打紙しているのは、料紙の加工に手間をかけて尊氏の願いを込める意図があったと考えられます。



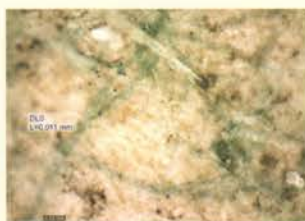
❖22「**悉曇要集記・悉曇集記加文**」梵字・梵語などの注釈書で、永治元年(1141)京都・仁和寺で書写されました。楮紙を打紙で平滑にし、帖首・末などには紙屋の印があります。こうした印は平安後期の經典や聖教の料紙に稀にみられ、宮廷の紙漉き所である紙屋院との関連が注目されます。

❖27「**武田信玄自筆書状**」武田信玄(1521~73)は、富士浅間社に、関所の通行料を免除すると誓い、大願成就したが関銭は免除されていませんでした。信玄は右筆を待たずに自ら筆を執り、責任者の成敗を命じました。神罰を恐れ、一刻も早く解決しようと、当時の武士が身近に用いた杉原紙という楮紙を使っています。



(757倍)

❖25「**古歌卷**」室町時代の武将で書家の飯尾常房(1422~1485)の筆跡。雁皮紙(鳥の子紙)に藍と紫の繊維を雲の形に漉きかける打曇を施し、金銀泥下絵を描いた料紙に、『万葉集』と『二十一代集』の各1首ずつを収めます。



(778倍)



❖08「**徐公文集**」中国の五代十国から北宋時代の政治家・文学者・書家の徐鉉(916~991)の文集。料紙は竹紙。表紙には、厚手の竹紙で優れた品質といわれた「宋版一切経」の料紙(蔵経紙)に印刷された本文を削って磨きを加え、裏返して使用しています。画像の左中央に「諸天」の文字が確認できます。